

# ガンダム00 : Second Coming

九条ヤヤ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

旧ユニオン・旧AEUの技術陣が共同開発した新型MS。

その性能評価、そして地上運用のために地球の軍事基地で整備をしている最中、予定の中には存在しない、ガンダムが攻撃を仕掛ける。

組織名を「Angelic」と名乗る、彼らの目的とは…？

(※オリジナル設定が多いです。ご了承ください。)

目次

第1話「来攻」	1
第2話「もう一つの世界」	7

## 第一話「来攻」

満天の星空が輝く夜。

森に住まう動物たちは、満月の明かりに照らされながら眠りについていた。

そんな中、ひと際まぶしい明かりを照らしている場所があった。

それは森林内に設置された軍事基地だった。滑走路に大型のMS輸送機が闇夜の静寂を乱す轟音を立てて着陸する。

輸送機からコンテナが格納庫へと運び出され、整備兵によるメンテナンスが始まる。

コンテナの中は新型のMS。この機体は現在、性能評価段階にあり、地上での運用試験の評価次第でこの機体の今後の行く末が決まる。

整備兵はいつもより、より一層気合を入れ、整備にとりかかっている。

ある者は仮眠室で横になり、ある者は愛機の側で仲間とコーヒーを嗜み、各々の夜を過ごしていた。

そこへ、ピンク色の閃光が降る。

轟音。衝撃。

仲間とのポーカーに負け、施設の外に出たオロフ・ヨーンソンが初めに感じたのは夜の涼しい風ではなかった。

けたたましく鳴るサイレン。

爆風に吹き飛ばされたオロフは頭をかかえ、顔を上げた。

「な、なんだあ？何が起こったあ??」

穴が空いた滑走路。黒煙をあげる輸送機。

再び閃光が降り注ぎ、的確に闇夜を照らす照明を破壊していく。

「こいつあただ事じゃなさそうだなあ」

俺は衝撃によって降つてくる小さな破片をかくぐり、格納庫へと走った。





右腕を一緒に持つていくことはできなかつたが、見たところ射撃兵装らしきものはもう装備してはいないらしい。

勝てる。

私はそう確信し、カーソルを敵機の中央に合わせた。

すると、敵機は背面へと手を伸ばし、そこへマウントされている“得物”を取り出した。

刀身だけでも機体全長を超えており、先ほど破壊したGNソード改に比べて遥かに長く、その細身な機体には明らかに似合わない兵装。

GNソードメイス。

それが現在ガンダムレリエルが装備している武器の名前だ。

「超大型の実体剣？でも間合いに入らなきゃ意味がないじゃない。」

私は敵機をロックオンし、高濃度に圧縮されたGN粒子をライフルから放つ。

橙色の閃光は敵機に命中し、激しい煙幕をあげた。

手ごたえはない。だが、こちらから一方的に攻撃を続けなければいずれは…！

煙が晴れ、第二射を叩き込もうと射撃トリガーに手をかける。

そんな彼女に衝撃が走った。

GNソードメイスを真正面に構えるガンダムレリエル。

その前には、淡い緑の膜が形成されていた。

「GNフィールド?!」

続けて二度、三度と、ライフルからビームを発射するが、それらは本体に届く前にすべて膜に阻まれ、無慈悲に辺りへと散った。

それなら…！

私はGNロングバレルビームライフルを投げ捨てると、格納庫の壁を破壊し、中からNGNバズーカを取り出した。

この武装は実体弾を射出する大型火器であり、「NGN」は「非GN粒子兵器」を意味する。

ただし、弾倉をGNコンデンサーに換装することでビームも発射可能となる、汎用性の高い武装だ。

現在この武器には炸薬式の実体弾が装備されている。

ビームが効かないなら実弾兵装で…！

素早く敵機をロックオンし、立て続けにトリガーを引く。

しかし、相手は大型の武器を装備している事を思わせないような動きで宙を翻り攻撃を避けると、一気に加速し、距離を詰めてきた。

GNソードメイスに内蔵されているGNコンデンサーから放出された粒子が刀身を纏う。

真横から大型の刃が迫り、遠心力も相まって凄まじい衝撃が彼女のコックピットを襲った。

NNバズーカと一緒に左腕が根元から吹き飛び、ジンクスⅢも共に真横へと弾き飛ばされる。

「このオー！」

すかさず左腰部にマウントされているGNビームライフルを手に持ち、敵機に発射する。

しかし弾が到達する前に、ガンダムレリエルはジンクスⅢに飛び乗り地面へと叩きつけた。

慣性によつて地面を滑り、激しい土煙を立てる。

次の瞬間には、ガンダムレリエルは片足をジンクスⅢの胴体に乗せ、機体を抑え込んでいた。

「うわああー！」

しかし彼女は諦めない。唯一残った右腕の、鋭利なマニピュレーター、GNクローをレリエルに向かって突き出す。

だが、腰部に装備されたGNロングブレイドを抜いたレリエルによつて右腕が切断され、彼女の最後の足掻きはあつてなく終わった。

GNロングブレイドをマウントしたレリエルは、GNソードメイスを逆手に持ち、反撃の手段を失ったジンクスⅢの擬似太陽炉へそれを深々と突き刺した。

動力を失ったジンクスの顔から光が消えた。

GNソードメイスを背面へ戻し、格納庫へ侵入したガンダムレリエルはNNバズーカを手にとった。

そのまま屋根を破壊し、上空へと飛ぶ。





## 第2話「もう一つの世界」

最近の技術の進歩は素晴らしい。

ドーム上部に取り付けられた大型の掲示板、ガンダムシリーズのコスチュームをし、談笑をする沢山の人たち。

電子世界への扉をくぐり、その光景を目にして彼が最初に抱いた感想はそれだった。

シーサイドベース、総合受付所。

そこはへガンプラバトル・ネクススオンラインへとログインしたプレイヤーが初めて足を地につける場所だ。

ガンプラバトル・ネクススオンライン 通称『GBN』

電脳世界『ディメンション』内で、ガンプラバトルを中心とした様々なイベントに参加できる、世界規模の最新ネットワークゲームだ。

詳細は知らないが、どうやら最近アップデートが来たらしい。

窓の外に目を向けると、そこには広大な街や景色が広がり、ガンダムシリーズに登場するMSが滑空していた。

本当にこの世界へ来たんだ…

そう感動に浸っている彼に

「おーい、こっちこっちー!」

人込みの奥から手を振り、こちらへと駆けてくる人物が一人。

野戦服のような地球連邦軍のジャケットを着こんだ彼の名前は『イチジョウ・ノボル』

ガンダムシリーズとGBNという存在を覚えてくれた友人だ。

そんなノボルに『ヒイラギ・ハルト』は「おう!」と答えると彼の元へ駆け寄った。

「おおおいノボル!!GBNってすごいな!さつきも外でMSが飛んでいたし、俺もあれに乗れるのか?!」

「ああそうだぜハルト。まあ色々言いたいことはあると思うがとりあえず…」



左右に1挺ずつ新型ピストルが懸架されている。

両腰部には新しくホルスターが設置され、中には取り回しに優れたピストルが収められていた。

『ケルデイルガンダム コンプリートサーガ』

それがこの機体の名前だ。

一見すると、ただケルデイルガンダムを灰色に塗装しただけに見えるが、状況によって多種多様な銃を扱い、どんな状況にも対応するというコンセプトで制作された機体だ。

今回ハルトは初めてMSに乗るため、武装のほとんどを外し最もシンプルな状態でGBNに持ってきた。

よってこれが本来の姿ではないのだ。

確認を終えたハルトが機体に入り込むと、足場が動きカタパルトデッキへと自動的に移動が始まった。

「おおい、ハルトオ」

突如コックピット内に小窓が表示され、そこにノボルの顔が表示される。

ノボルの背景とそこから聞こえる音からして、彼は先に出撃したらしい。

「しっかりとカメラで録画しといてやるから、パアアつと決めちまいなパアアつと！」

「ああ、言われなくてもやるさ。ずっと楽しみにしていたからな。」  
機体がデッキへと運ばれ、足元が射出台に固定される。

光の破線が出口へと延び、上部に設置されたランプが青に変わった。

ハルトはこれまで見てきたガンダム作品の登場人物かの如く、高揚と叫んだ。

「ヒイラギ・ハルト、ケルデイルガンダム コンプリートサーガ。出ます!!」

風を切る音。身体全体にかかる圧力。

次の瞬間、ハルトは架空の空へと飛び出していた。



サイルポッドや小型バルカン砲、機雷などの実弾兵装が取り付けられていた。

前に彼が言っていたのだが、リ・ビズイがMS形態になった際には上空で待機し、周囲を把握するマルチセンサーの役割や、敵機へと砲撃、爆撃をするサブフライトシステムを兼ねた支援機にもなるらしい。

そんなリ・ビズイは現在、ウェイブライダーと呼ばれる形態になっており、ハルトの真横をぴつたりと飛行していた。

「このバトルは出現する敵を三体倒せばクリアになるんだ。誰もがやってる簡単なバトルだから、そう緊張しなくてもいいさ。」

「してないよ。それ以上にわくわくしてるさ。」

すると、正面に半透明の巨大なドーム状のものが見えてきた。

「どうやらあそこが戦闘エリアらしい。」

ケルデイルガンダム コンプリートサーガとリ・ビズイは加速をつけるとドームの中へと飛び込んだ。

正面に『MISSION START』と表示され、目標である〈リーオーNPD〉が三体出現する。

リーオーは新機動戦記ガンダムWで登場した量産型MS。

今回はそれをAI Non Player Diverが操作する無人機を倒すのが目標らしい。

「それじゃあ、俺は上空で見とくから、頑張れよ！」

リ・ビズイが離脱するのを見送ると、俺は肩から主武装であるGNスナイパーライフルIIを装備し、敵へと構えた。

目前にスコープが表示され、先にいるリーオーNPDの顔がはっきりと映る。

カーソルを顔の真ん中へと持っていき、射撃トリガーに指をかける。

「コンプリートサーガ、目標を狙い撃つ!!」

機動戦士ガンダム00に登場する〈ロックオン・ストラトス〉というキャラを意識し、俺は引き金を引いた。

銃口からピンク色のビームが射出され、それはドーバーガンを装備したリーオーNPDの顔面を貫いた。

空中で機体が爆散する。

「やった、当たった！」

「ナイスショット！ほら、残りは二体だ！片づけちまいな！」

カーソルをもう一体のリーオーNPDへと向け、ロックオン。

画面の中で灰色のその機体は、身体をくの字に曲げて爆発した。

「残り一機！」

最後の敵へトドメを刺そうとスコープをのぞき込む。

しかしそこには画面いっぱいには灰色が表示されていた。

二体を狙撃している間に近づかれたらしい。

リーオーNPDが手にするマシンガンの銃口が光る。

「!!」

俺は操縦レバーやブーストを駆使してこちらへ飛んでくる猛攻を躲す。

機体の各所に弾丸が命中するが、それほど大したダメージ量ではない。

接近された機体には、スナイパーライフルみたいな銃身が長い武装は非常に相性が悪い。

よって俺は、自機の背面に手を伸ばすとそこに伸びているグリップを握り、副兵装であるGNピストルIIを敵機へと向けた。

威力は低いものの、取り回しと連射性に優れる。

「やああああー！」

射撃トリガーを引きつぱなしにし、射線上の敵へ必死に反撃する。

やがて最後のリーオーNPDは身体に無数の風穴を開け、その身を空へと散らした。

「Battle end」という電子音と共に『MISSION COMPLETE』と文字が表示される。

「おおおお！やったじゃんハルト！カッコよかったぜ！」

「ありがとう！俺結構操縦いけるかもしれない…」

と、レーダーに新たな点が現れ、ハルトはそちらへと注目した。動きからして、こっちは高速で接近して来ている機体があるらしい。

それはノボルのレーダーにも表示されていたらしく

「なんだあれは？」

「待って、確認してみる。」

ケルデイルを地面に着地させ、頭部に搭載されているガンカメラを起動する。

その正体は、

「なんだあれ…？ガンダムデユナメス…？」

それは、ハルトが搭乗するガンプラ、ケルデイルガンダムの前身機、ガンダムデユナメスの改造機だった。

機体が近づいてくるにつれ、その詳細が明らかになる。

機体の頭上に背面から延びたビーム砲が二門並び、右側に機体全長にも達しそうな細身の三角柱が三本、左側に機体がそちらへ傾くか不安になる程の大型のコンテナがそれぞれアームの先に取り付けられていた。

脚部はスキー板のようなもの—アヴァランチエクシアのダッシュユニットだろうか…？—に乗っており、一見すると小型のGNアーマ―TYPE―Dを装備しているような感じだ。

他のプレイヤーかな？

そんなのどかな考えを、《CAUTION》と鳴る警報がかき消した。

「避けるハルト!!ロックオンされてるぞ!!」

同時にデユナメスの改造機のガンカメラが露出し、右腕に装着されている三角柱が電流を纏う。

刹那、ケルデイルの右後方で大地が爆砕し、激しい土煙が舞った。

「?!」

地面がはるか後方まで抉れていた。

デユナメスの改造機の右腕に取り付けられていたのは、ただの柱で











高度を下げ、周囲の警戒を強める。

この煙幕に便乗してここから逃げ去るのか、あるいはこちらを倒そうと何かしらの策を講じているのか。

何はともあれ、この煙幕から抜け出すのが一番の良策であることに変わりない。

バーニアからGN粒子を放出し、加速。

その勢いのまま煙幕の中から飛び出し、機体を旋回させる。

レーダーもある程度視界を取り戻した。しかし煙幕がかかっている所は表示されず、全てを把握できたわけではない。

「…さて、いつ来るかな?…もしかしてもう逃げた?」

途端、《CAUTION》と警報が鳴り、煙幕の中からビームが飛び出した。

しかしそれは命中せず、マトリエルの頭上を通り過ぎる。

アハツ、それじゃあただ自分の位置を晒しただけじゃない。

ビームが飛んできた方にGNレールガンを向ける。

「さようならっ」

鋼鉄の弾丸が音速の域で発射され、目の前の煙が一瞬で晴れる。

しかし、そこに居たのはあのガンダムタイプではなかった。

もう一機居た青いヤツ。しかしその身体は丸みを帯びていて、ぷかぷかと浮遊している。

その傍らには格子状に配置されたシールドビットが浮かんでおり、GNレールガンの弾はそれに命中し爆散した。

「まさか、ダミーバルーン?!」

直後、別方向から飛んできた光線がGNレールガンの給電レールを跳ね飛ばした。

それは間違いなくあのケルデイルガンダムの攻撃…

位置を晒したのはこちらのほうだった…!

GNレールガンに火花が走り、やがてそれは銃身全体へと広がる。

急いで投げ捨てると、轟音と共にそれは派手に爆発した。

エイミーは赤面し、残った武装のGNキャノンへ粒子をチャージ。そちらへ向ける。





初めてのGBNであんな戦闘を行って殆どダメージがないのも大したものだが、とにかく修理が完了するまでガンプラには乗れない。現在二人はバトルで稼いだ通貨「ビルドコイン」で買い物をするため繁華街へと移動している最中だ。

その道中に、ハルトが初めて降り立ったシーサイドベース、総合受付所を通るわけだが：

：何やらざわざわと騒がしい。プレイヤーの殆どが上部に取り付けられたモニターに注目している。

何が起こったのか、最寄にいたパトリック・コーラサワのダイバーに尋ねる。

「んあ？何かGBNが電波ジャックされてモニター全部にアレが映ってるらしいぜ。」

皆が見るモニターの中には、「A」の文字に天使の輪と翼、そして中央に地球が描かれたロゴデザインの背景。

そして、そのロゴで顔を隠した人の上半身が表示されていた。

それはまるで、例えるなら「SAW」というホラー映画で「ジグソウ」というキャラクターがモニターに表示された時を連想させるような、不気味さを纏っていた。

『GBNにログインしている皆様。ごきげんよう。』

突如、ボイスチェンジャーを通して喋るような低い声がスピーカーから流れ始めた。

『私たちはAngelic。GBNに平和をもたらすことを目標に活動する組織です。』

周囲の中には端から興味がなく、その場から去るものやメニューを開き手作業を始める者も居た。

しかしそれはメニュー、携帯端末、掲示板。どこにでも現れる。

『私たちは本日から、4機の機動兵器“ガンダム”による武力介入を開始しました。ログインしているダイバーの中には、もうそれを体験した方もいると思います。』

画面上に4枚の写真が表示される。

それは『機動戦士ガンダム00』に登場する機体『エクシア、デュ



ナメス、キュリオス、ヴァーチエ』の改造機の写真だった。

デユナメスの改造機に関しては見覚えがある。それもそのはず、さつき俺たちが戦闘した機体だ。

その男（でいいのだろうか…？）は、話を続ける。

『武力介入の対象はフォース、ランクを問わず中正に行います。危害を加えるようであれば、例えそれが運営であつても武力介入の対象となります。』

再びロゴと男性が表示される。

『私たちはAngelic。GBNを平和にすることを目的として結成された組織です。』

そこで画面に砂嵐が走り、クエストやトーナメント表が表示されている元の掲示板へ戻った。

「運営も敵にまわすつてよwできるわけねえじゃんwww」

「00関係のイベントかなあ？楽しみ！」

「どのくらい強いんだろう。戦ってみたいなあ。」

「危害を加えるつていったい何に？」

「そもそもGBNで武力介入つて行為が無意味じゃね？」

鼻で笑う者、何かの演出かと目を輝かせる者、SNSで情報を調べ始める者…

周囲の反応は様々だった。

ノボルはハア…と息を吐くと

「ビギナーの中には他のダイバーから嫌がらせを受けて辞めちゃう人もいるんだ…あれがイベントの告知かどうかは知らないが、初心者のはルトに過剰な攻撃をしたのは事実だ。…散々なGBNデビューになっちゃったが、大丈夫か…？」

ハルトは頷いた。迷いはなかった。

「俺は何も気にしてないよ。…にしても、めっちゃ面白いなこの世界！なあ、今度俺のケルティムで試したい事があるんだけど付き合ってくれるか?!いや、その前に買い物だったな！早く行こうぜ！」

ハルトは特に何も気に留めていないようだ。

俺はハルトの後に続き繁華街へと向かう。

…それにしてもAngelica、か…  
マスタイバー事件のように大事にならなきゃいいんだが…